

伊 藤 整

新潮社版

伊 藤 整

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162

印刷所／二光印刷株式会社 製本所／神田加藤製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／日本クロス工業株式会社

目次

生物祭

五

馬喰の果て

一五

破綻

三〇

生きる怖れ

三六

海に見える町

九一

氾濫

一三三

注解

一五九

年譜

一七三

解説

一七五

平野謙

伊
藤
整

生物祭

水が何より旨い、と言って、父はときどき水をもとめるほか殆んど何も食おうとしなかった。手や足に浮腫^みが出て来たので、もう何日も持たないだろうと母が私に言った。そう言う時の母の表情が少しも乱れていないのを私は見た。父の病気が絶望的だと解^とつてからの二年は母の顔から表情らしいものを取り去ってしまった。父の世話をしている母の顔を見ると、病状の變化^{へんか}ということとは父の生きていることと何の關係もない自然現象で、父は病に憑^よかれたまま何時までも生きていると信じているようにも見えるほど動揺の跡がなかった。近所の人がなにか楽しい話を母のために持つて来る。そんな時、母は笑うのだが、それは母の二重の外側にある顔で笑がおさまると次の瞬間からすぐまた母は茫然とした無表情の状態に陥^おっているのだ。危篤

という電報で私が帰って来てから、父はまた持ち直して、前と同じような状態がもう十日も続いていた。父は言うことも目や耳も割合にはつきりとしていた。だが何も特別考えているようには見えなかった。病床の二年が父の思考力をすりへらしてしまつたのか、と私は思った。家のことについて心配らしい言葉は全然父の唇を漏れることがなかった。そこにはしかし何の抑制も無いようであつた。発作の激しい時にはなにかと無理を言つて怒ることがあつても、その他は絶対的に母に信賴して、薬や手当についても意見を述べることもなかった。

私が家についた日、母は父の氣持を推測して、学校の移転で今年は夏休みが早くなつたのだと言えと言つたが、父は私を見て、驚きのようなものも、喜びのようなものも示さなかつた。休みの早くなつたことを言う^うと、父はそれには答えず、学校の様子を色々聞いた。どんな教師について何を研究しているか、東京にいる知人はどんな生活をしているかなどと。私は見え透いた言訳はしない方が宜かつたと思ひながら、外のこととは何も言わずに自分の室へ引込んだ。

夜中に発作の起きた様子があつて眼を覚ますともう母は起きていて色々と手当をしているようであつた。水をとり台所の方へ行ったりする足音で、父の様子は聞き量りながら私は起きなかつた。二日間の汽車旅行の疲れが頭とは別に私の身体を眠りの方へ縛りつけていた。起きなくても宜いと思ひながら私は少年時代に使い古した自分のテエブルの脚を見ていた。そのうちに父の発作は静まつたようであつた。父の死そのものを考えることは私を少しも動かさなかつた。ただ父が、自分の死に直面して、どんなことを思っているのか、ということが執拗に私の中に湧いて來ていた。

朝、遅く目覚めると、出勤前の弟が縁側で鶯の爪を切っていた。父は横からそれを見上げながら、何かと注意を与えていた。弟はそれに何も答えずに、鶯に水浴びをさせると、また縁側に吊した。「この鶯ももう三歳だから大分老年だ」と弟が言つた。すると父が、「いや爪さえ切つて播餌はりえを加減しておけばまだ大丈夫だ」と言つた。鶯が突然、けきよ、けきよ、けきよ、けきよ、と鳴き出した。そして何かを思い出そうとするように首を傾けた。父は午前日光の中で、いかにも楽

しげな明るい顔でそれを見上げた。そして「これは『谷渡り』が長いから、なかなか良い鳥なのだ」と言つた。父がそんなものに寄せている安らかさが私を驚かせた。死の数日前にありながら鶯を楽しんでいる父のそんな静かな気持は私の推測されないものであつた。

「少し上つて見ますか」と言つて母が重湯を文度して來た。そして父の手をとつて見て、「今朝は浮腫がいくらか引いたようです」と言っている様子にも、まだそれがこれから何年も続くのだと言ふような調子しかなかつた。「鶯の籠を」と父が言つた。そして急に咳き込んで來て、ものを言えなくなつた。そしてモルヒネの入っているらしい黒い水薬をやつと一口摂つて、暫くじつと耐えていたが、「籠を日陰へ移せ」と言い終えて、また激しく咳き始めた。母は盆を持つて戻り、また発作の手当にかかつた。私が鳥籠を日陰へ持つてゆくのを父はしつきりなしに咳きながら見送つていた。

道の両側は六月で李すももの花が強く匂いながら咲いていた。藪のなかで李の枝の繁みは、細かい紙片を集めたような真白い花をつけ、風の無い日光の中にひっそり

と咲いていた。その匂が私の頭を重くした。虎杖の葉がほぐれたばかりの新鮮な色で揺れた。崖の下の人家的な方で、犬が吠えていた。海岸まで続いているその長い道には人影がなかった。私はステッキを振りあげて、頭上の李の花の一番濃く群がっている処を殴りつけた。枝が折れて花卉がくるくると回転して、藪陰に眼に見えずにあった蜘蛛の巣にかかった。私は足もとの李の枝を藪のなかへ蹴飛ばしてまた歩きだした。誰もそれに気づいていないことが私をまだ落付かせなかった。私はどこかに閑古鳥の鳴声を聞いたように思った。落葉松の新しい芽の吹いた林の方で鳴いているらしかった。それは北国の春であった。父の病氣をとり巻いて私を育てた北国の自然は春の真盛りなのだ。空気が暖くよどんで、黒い掘り返された畑の間の林檎の花や牛や馬や鶏などを暖めていた。それは頭痛持ちの母を悩ます季節であり、私と弟とが霞網を持って渡り鳥を捕えるために、夕暮の岡で時間を忘れた季節であった。草木の上に満ちている軟かな陽の光は、しかしあまりに空虚であった。殆んど私が嗅いでいるに耐えられないような李の花が、その春の真中に、誰にも知

られずその傍を通る人もなく咲いている。私の幼年の情感のなかに群がり、私の夢の中に重い葉を揺るがしながら、いつか記憶の奥に埋もれていた北国の風物である落葉松や、虎杖や、藪や、蓬が、その斜面を満たしているのを見ると、私はその中へ倒れ込みたい衝動を感じた。そして林の中から聞える間の延びた閑古鳥の声が、私のずっと奥の方の、抑制することもできない感情を掻き乱した。私を呼びもどしたのは父の病氣であった。それなのに、私の這入って来たところは、人を狂気にするような春の生物等の華麗な混乱であった。私は落葉松の林に入って行って幼児の睫毛のようなその新しい葉を掻いた。藪の葉は私の脚におしつけられて白い葉裏を見せた。その葉の下に伸びあがっている細い草は少年の透きとおる皮膚と震えやすい感情を思わせた。これ等の植物は暖い空気の中に息をはずませ、陽の当る方へ枝や葉をさし伸べている。山の斜面から崖のあたりへ一面に緑が波のように崩れかかり、よく見ればその一枚ずつの葉が私の方を窺っている無数の顔に見え、風もなく物音もないのに何かの意味でも感じとった群集のように、一斉にゆらゆらと揺

れている。知ってるぞ、知ってるぞ、とそれ等は言うようであつた。私は私を埋めていたそれ等の葉の繁みから逃れて林の中の空地に立ちどまつた。足下に音を立てるものがあるので、見ると、蛇が石の下から褐色の長い肉体をのぞかせていた。こいつだ、と私は思った。蛇は滑り出した。少年時代の激しい感情の戦くのを感しながら、大きな石を持って、追いかけてゆき、叢に隠れてじつとしている蛇の頭の上からそれを落した。蛇は尾の方をひどく痙攣させていたがやがて動かなくなつた。その石をステッキでのけて見ようとして、私は躊躇し、やめた。

家へ帰つてから帽子を脱ぐと、李の花弁が鏢つばの上に落ちていた。父は眠つていた。そして鶯だけが、父の眠りの上で、首をかしげては、ほほう、けきよ、けきよ、けきよ、きけよと繰り返していた。私は父の顔を見ながら、かつて自分は暖い心でこの父に接したことがあつたろうかと思つた。だが、父は死のうとしてゐる。起りうるものがあれば、それは今私のなかに起るかも知れない。

医者は処方箋を書いてしまふまで私の間に答へなかつた。彼の太い指の爪は綺麗に切られていた。そして眉ひとつ動かさない彼の顔には、職業的な静けさしか見られなかつた。

「もう長い間の御病気でですから、御身体が全体的に弱つておりますし、ただ心臓が特別に強い方ですから、ああして絶望的になつてからも暫く持つていられますが、どうでしょうか、あと一週間位で何か変化があれば難かしいと考えますが。」

医者はテエブルの端を見ていた。私の眼の前に彼の厚い唇があつた。するとその唇の動くことでなくつて、そこで言われたことが私に重大なのだ、と私は悟つた。そして私の見ている彼の唇は無気味なひとつの運動になつた。父の死は既定の事実だ、と私は自分自身に先まわ里した。しかしながら医者のこの平凡な言葉の与えた衝動は、私が先まわ里した部分を通らずに、いつの間にか私の内部の片隅に届いていた。私は眼の前のテエブルの端を指で撫でている自分を発見した。それは私が一番困却した時にする習癖のひとつであつた。医者はそれを見ながら言つた。

「私としても色々と努力して見ましたり、新しい薬を取り寄せて試みたりいたしました。が、あまり著しい効果も見えませんでした。今日の医学ではまだ根本的なあれの療法というものはありませんので。」

私は立ち上って出て行ったが、廊下の正面の薬局まで来ると、そのなかで看護婦が二人なにか忍び笑いしていた。すると私は自分の笑えなくなっている状態を思い出した。私と彼等との間にある差異は、生の方へ繋がるものと死の方へ繋がるものとの、絶間なく増してゆくそれであった。それら総ての笑や、看護婦の薔薇色の頬、薬剤師の白衣の汚れなどは私には全く無意味であった。すでにその薬壘すらも持つて帰る要のないものかも知れぬ。私がそこで薬壘の充たされるのを待っているのは、習慣と礼儀とからであった。

外へ出ると、病院の垣根には八重桜が咲き乱れていた。これらの花の息詰まる生殖の猥雑さを、人は怪んでいないのだろうか。白い看護婦たちの忍び笑う声を内包した病院の建物の外で、桜は咽せかえるように花粉を撒きながら無言のうちに生殖し生殖しそして生殖している。そして看護婦等の肉体は粘液のようなもの

を唇や腰部から分泌する、病院の光った廊下をスカートを曳いて走り、扉の握りを開くときに。洗面所のタイルの中で水が流れている。彼女等は看護服の中に棲息している女性なのだ。処女であり、またない。処女である女と処女でない女とが白い看護服に身体を包んで笑っている。その窓の外にある桜の花の生殖。それに彼女等は気づかないのだろうか。総ての花や女等はなにかを分泌し、分泌して春の重い空気を一層重苦しくしている。だがその春は私のものではない。誰かのもの、誰か外の人のものだ。私は今死のうとしている者の子だ。父は、家にいてあの力の無い、傍で見ているのも苦しい発作を繰り返している。父は、父の前に置かれる総てのものに激しい錯乱を覚えるのだ。私の顔の筋肉も、私の腕の動きも、私の感情も、目の前にありながらどうしても掴むことのできない苛立たい正体の不確かな春の方に溺死者のように手を差伸べ、そして絶対にそれから拒まれていくのだ。この春は私にとつて異邦人の祭典にすぎない。それは淫靡な、好色な、極彩色の、だらけた、動物や植物や人間共の欲楽だ。それは谷底にあるこの小さな町じゅうに群れて

湧き立ちながらあふれ、腐れかかったものには蛆を湧かせ、沈黙しているものには狂気の偏執を与え、死にかけたものに今一度生の喜びを窺わせ、生物の粘膜の分泌を盛にし、至るところの樹皮から新しい芽を吹き出させて、私の肉身のまわりに渦巻き、私の情緒の襷に浸透しながら洪水のように流れている。

父は眠っているのだと思ったが、私は枕もとで小声に「医者は午後に来るそうです」と言った。すると父は眼を開いて、私を見上げながら、「そうか」と言った。父はこんな風にしていいのか。自分の死にのぞんで父は何をしているのか。父は最期まで、ただ病人であり、病気を終えることによって自分を終らせて悔いある処はないのか。それは氣力の消滅だろうか。諦めだろうか。でなければ、此処に来て、まだ自分の死期をはっきりと知ろうと欲しないのだろうか。

「お父さんは、自分で知らないでいるのかしら」と私は母に言ってみた。

「知ってはいるだろうが」とだけ母は言って針を動かしていた。一月ほど前から氣分の少しいい時には、父

は経文を読んでいたと言って、それが枕もとに置かれてあった。だが経文は死と関連しているよりも、むしろ発作の苦痛と疲労の慰安でしかないのではないか。父が今しようと思えば、父の意志で片づけなければならぬことがいくらかもあるのだ。では父はまだ回復するつもりでいるのか。もう一週間、と父に知らせてやるとしたならば、と思つて見て、私は父を失う自分を忘れようとしていたのに氣がついた。父を失おうとしているのは私か。そうだ。お前だ。それなのに私は自分自身のことをさて置いて、父の氣持だけを推測している。

「でもお父さんはN家からの借金やGの畑地の問題をどうする積りなんでしょう」と私はたった今自分を賣めて抑制したよりも更に事務的な言葉が止める暇もなく自分の口から飛び出したのに氣づいて、我ながら蒼白くなり、自分にこたえる痛さだけそのまま詰問的な眼を母に投げかけて言った。

「そんなことを今になって言ってもお前」と母は頭をあげずに手を止めて言った。

「だって何時期限が来て、どんな不利な条件になるか

も解らないし」と私は自分の声が父に聞える程高くなっているのを知りながらやめることが出来なかった。「それをどうしろとかどうしたいという訳でもないのだし、」もう一度治ってお父さんは自分でするつもりなのか、と言わねばならなくなつて私は息を呑んだ。そして死にかけている父の喉の傷をぞくりと自分の手で引っ掻いたように私は飛び上りたい衝動に駆られ、喋っている自分を踏みつけて踏み潰して、地の中にめり込ませたくなつた。そして私に答えようとしなない母の沈黙は、惨めに投げ出された私の醜さに対する思い切つた残酷さで、いつまでも続けられた。

家のものが寝静まつてから私は散歩に出た。曇つた、生暖い夜で、風はなかった。李が女の横顔のように闇に浮いていた。それを嗅ぎに私は来たのだ。こんなことをしているのを、私は誰にも知られたいと思つて、李の木の下で闇にじつと立っていた。それはあらゆるものの匂を私の中に押し流した。その匂の持つて来る形象を、私は知ろうとしなかった。だが私は、私の感情の酔おうと欲するものの全部がその中にあるの

を知つた。私は花の匂の中に女の匂を捜し、そこに閃きすぎる女の皮膚の、髪の毛の、性の匂にすがりついて眼をつぶる。女教師の豊かな腕が十歳の私を押えると私は身をよじつて反りかえり、彼女の内懐の不思議な甘い匂を吸いこんだ。大きな髪の毛の束が象のような女の上の暗い陰をつくっている。むっちりとした肉の盛りあがった女巨人。その女教師の燃えるような黒い眼がいま闇のなかに輝く。彼女は私を追いかける。私は彼女を見上げながら擦られるのを拒むように身をすくませる。彼女の黒い眼が闇の中に一杯になり、その手と胸と袴の下腹部とが私に掴みかかつてくるときの戦くような快感。それはまた中学生の私の洋服を借りて着て歩いた親戚の年上の娘、彼女の肋膜のために紅潮した頬、私が引っかけまわした彼女の引き出しの中の人形、空の封筒、貝殻、クリムであり、彼女の髪をうまく私の帽子の中に入れてやるときの無気味なほり出ししたいやるせなさである。それは私にかまつてくれない姉の友達等の消えた笑声である。そして突然それは悪しきをもつて私が投げ出した女の記憶であり、私の頭に今なお満ちている女性の群である。

此処は闇の中だ、と私は自分に言う。この強烈な匂に溺れるがいい。此処には匂のほかは何もないのだ。私の頭を勝手に酔わせるがいい。父はどうしているか。眠って、死の前の不安な呼吸を喘いでいる。お前は誰だ。その父の子だ。今死のうとしている者の子が此処の花のなかで眼をつぶっている。この李の匂のなかにいる、ここに私をとり巻いているのは何だ。女どもだ。数限りない、裸形の、匂をまき散らす妖精どもだ。夜のなかに群がってそれ等が私の方に腕を差しのべている。私は歩いて行く。壁のような花の並樹の底を。ずっと向うまで李は枝をのばして、私の近よるのを待っている、私がその匂に窒息して昏倒するまでの花は尽きそうにもない。朝、この路上に私は俯向けに長くなっているのではないだろうか。昼見れば、藪の中に不格好な枝を交わし、紙屑のような花を飾っている李の下に。そうすれば、私が父を愛したという記憶を持たずに死んだということも人々に気づかれずに終る。

どこかで鶏が眠むたげに、夜中に鳴いている。もう夜更けだ。人々の睡眠の上に夢魔が身を屈めている。

人々は夢魔に引きまわらされている。人は夢のなかで力なく戦う。追いつめられ、汗を流し、うめき、絞めつけられている。そして少し眼を開いて鶏の声を聞き、夢だったと思い、汗をぬぐう。夜中なのがわかる。時計の振子の音がする。母や弟たちは疲れて眠っているのだらう。だが父にはもう睡眠と覚醒との区別がなくなっている。父の眠りはすぐ破れてはまた続くのだ。外を歩いているこの私のことを、父はあるいは薄い思考力のなかに浮べているかも知れない。咳をしなげら、絶えず、生きている間はしつづけなければならぬあの咳をしなげら。

私は眠りのなかで、鶯の鳴くのを聞いていた。その声が少しずつ、私は眠りから現実の方へ引き離していった。その声だけが暫くの間、私の意識を充たし、まだ軟かなその眼覚めた部分を揺すぶった。それは遠いところで甘く愁わしく、ほほう、けきよ、と言っていた。私はたしかに自分の室に寝ていた。けれどもそれ以外のことは、まだ私の精神に這入って来なかった。鶯の声は、十五歳の私が眼覚める朝のように、私の幼稚な

情感に切なく訴えた。私は真蒼な路の葉の下を蛙のように、棄てられた小人のように迷って歩いたのかも知れない。そして私は深い草木のかげに響く鶯の聲に騙されている。私は蕨の巻葉を開いて見る。その幼児の握り拳のような巻葉の中には、緑色の粉があるばかりだ。空気は雨あがりのように澄んでいる。それで鶯の声があんなによく透るのだ。けきよ、けきよ、けきよ、けきよ、けきよと、その終りのない繰り返しが私の軟い触感の節を震わせる。私は眼の前に白い花のようなものを見る。すると私の耳へ咳をする音が、力なくいつまでも咳きつづけている父の音が聞える。私の眼の前には、障子が現われる。私は家の中のひっそりとした様子に耳を傾ける。障子のかげを通る誰かの足音。父の咳は止んでまた始まる。その咳は眼に見えず、私の夢のなかにも眼覚めのなかにも織りこまれてゆくのだ。父の苦痛に歪んだ麻痺的な表情が私の顔の隅々にひそみ、私の肉身のすべての非力を敗北感と、私の精神の見るに耐えない卑屈さとに、私はまざまざと父の属性を見るのだ。嘲笑を背にして逃げ去る私の姿は同じ場合の父の身の曲げ方であり、哀れな闘争欲に駆ら

れて私が人に振りあげるのは父のみじめな細い腕だ。その残虐なつながりのために、私は父を正視することが出来ない。父の生涯につきまといたと同じ躰きが、屈服が、妥協と誤魔化しが、無限に私の生活等待っている。その一つ一つに耐えねばならない無数の日々が私にやって来る。私は私自身からすら飛び去りたいのに。父が戦って来たというだけの理由によつて平穩にいま去つてゆくのは宜い。だがその枷を身につけてあなたの子はすでにここにいるのだ。

私は不規則にふくらんだ障子の棧を見ていた。私の眼頭に湯のようなものが盛りあがつて、溢れ、顛顛の方へ流れた。障子は歪んで、霞み、紙と一色の白さになつて宙に浮いた。片隅がずきずきと痛む私の頭に、鶯がその鋭い鳴き声を刺し込んだ。けきよ、けきよ、けきよ、けきよ、けきよ、けきよ、けきよ、けきよ、けきよ、けきよ、疲れてやめた。その声を反響させて戸外はまた白く煙った午前であるらしい。私はまだ寝足りないように感じて眼を閉じた。

「峰子に電報を打つておいで」とその日の午後、医者

る姉のところへ、私は郵便局で電報を書いていた。
「チチキトクスグコイ」それが全く無意味な片仮名の
一列であるように局員に受け取られると私は外へ出て
周囲の真蒼な山々を眺めた。処々に白と赤の花をつけ
て、遅い春の緑が、この町の周囲を一面に埋めていた。
その吐き出す息づまるような酸素が谷底の町のほう
へ重々しく停滞して、それに耐えぬものは死なねばな
らないようであった。

(昭和七年)